若きチャレンジャーたち

目指すは ロンドンオリンピック アマチュアボクシング 期待の星　井出羊一さん（18歳）

素顔の井出選手。2月13日で19歳になる。

闘う井出選手　関東大学ボクシングリーグ戦 vs 日体大（2009年5月9日　後楽園ホール）

「え～っ、この人がボクシング選手？」井出選手に初めて会った印象だ。

2008年高校総体ボクシングバンタム級で優勝、AIBAユース世界選手権のバンタム級日本代表となりメキシコへ。その結果同年のアマチュア全日本ランキングジュニアの部バンタム級チャンピオンに輝いた、という素晴らしい実績を持つ。それなのに端正で穏やかで優しげで、とても激しいスポーツをやるような青年には見えなかったのだ。

現在、平成国際大学1年、ボクシング部。ボクシングを始めたのは東村山三中2年の終わり頃。それまで少年野球チームに入っていたが、「チームプレーより格闘技をやりたい」と野球をやめた。それには若い頃プロを夢見てボクシングをやっていた父親の一浩さん（50）の影響があったのだろう。遊びでボクシングの真似事を親子でよくやっていたという。

中3から清瀬駅近くの沼田ボクシングジムへ毎日通うようになった。この頃から父と息子との朝練がスタート。早い時は早朝4時半から、東村山の運動公園で父が基礎を教えた。毎日違うメニューでランニング、ダッシュ、グローブをつけての打ち合い。これは今も続いている。が、決して一浩さんは「気合ダ～ッ」と叫ぶような、スパルタ親父ではない。「起きられない時はやらなくていいんですよ」とあくまで羊一さんの自主性にまかせているが、息子がさぼったことはほとんどない。

高校はジムの沼田会長の勧めもあり、ボクシングの名門、花咲徳栄高校へ。見学した時、大学も含め100人ものボクシング部員がいて、リングの周りには観客席もあるりっぱな施設にびっくり。アマチュアの世界を初めて見て、進路を決めた。

「1年のときはスパーリングが苦しかった」ものの、日頃の努力と練習の成果が、最初に記したように、突出した成績で花開いた。ボクシングは何よりスタミナ、持久力、それに瞬発力が必要とされる。強くなるためには練習以外にないという。精神面を鍛えるにも練習あるのみだ。

朝練後、加須市にある大学へ1時間半かけて電車で通い、授業の後は部の練習、帰宅後は自転車でジムへ。9時頃帰って食事という毎日。息抜きの時間はあるのだろうか？「弟（羊一さんは双子で兄）がアルバイトして買ったCDや雑誌を貸してもらうので、お金もかかりません。休みにはカラオケ行くこともありますし、まぁ、フツーに楽しんでます」と爽やかな笑顔で応えてくれた。

昨年11月開催の全日本選手権の試合ビデオを見せてもらった。そこには目の前の羊一さんとは全く別の姿…ヘッドギアをつけ、相手に向かっていく闘志溢れるボクサーがいた。この時が2回戦で対戦相手が強豪、自衛隊体育学校の須佐勝明選手。惜しくも判定で負け、この後須佐選手は優勝したのである。

「負けた試合を反省して、冷静に自分の悪いところを判断する。次回までに練習で直す努力家ですね。私は父親というより、ただ先に生まれただけという感じです」と一浩さん。「父は道を正してくれる人」と言葉少なに語る羊一さん。羨ましいばかりの信頼関係。これも共に汗を流し、闘ってきた父子ならでは。「試合後リング上でレフェリーから手を上げられた瞬間の達成感。そのためにはどんな苦しい練習にも耐えられる。それがボクシングの魅力です」。目指すは2年後のロンドンオリンピック出場だ。

高校、大学と指導している木庭浩介監督が語る。「とても将来性がある選手。石川遼君にも似ているでしょう。彼は左のカウンターパンチがとれる選手。『左を制する者は世界を制す』といいますが、右を覚えればもっと強くなれる。オリンピックも夢じゃない。ウチの大学から出したい期待の星です。それに何より両親、弟と家族ぐる

ドイツ生まれのドイツ育ち 日本の助産師になります

ソーナ・カリンさん（25歳）

ハイデルベルグでの結婚披露パーティの時。幸せいっぱいのカリンさんと夫の大貫仰さん。（2009年9月）

「子どもは３人ほしいけど、日本では子育てにお金がかかりますね」ハンドクラフトが得意、素敵なママになるでしょう。（自宅前で）

みで、ひとつの目標に向かっているのが素晴らしい。ほんとにいい家族です」

目標とするのは去る1月11日にWBA世界スーパーフェザー級チャンピオンになった、高校の先輩、内山高志選手。良き師と家族の熱い応援に支えられ、世界に羽ばたいていってほしい。井出選手ガンバレ～！

ドイツ人を父に、日本人を母に持ち、ドイツ生まれ、ドイツ育ちのソーナ・カリンさんが、日本の助産師国家試験に挑戦しようとしている。

ドイツ、ウルム大学付属病院の職業専門学校を一昨年卒業し、助産師の資格は取得しているが、日本で働くためには、日本の国家試験にパスしなければならない。話す方は日常会話に支障はないが、読み書きが自称、小学3年程度という。この1月から渋谷の日本語学校に通いはじめた。12月に日本語能力試験を受けた後、助産師国家試験に挑戦するつもりだ。

それではなぜ、カリンさんが日本へ来たのか？それには日本とドイツを結ぶ運命的なストーリーがあった。

カリンさんの両親はかつてデンマークで開かれた、エスペラント語の大会で知り合ったのが縁で結婚。ハイデルベルグで生まれたカリンさんが2歳の頃、留学のため滞在していた大学の先生、大貫隆さん一家と家族ぐるみの付き合いがあった。そしてその家族には6歳の男の子がいた。

カリンさんは高校卒業後、イギリスに1年滞在。ホストファミリー宅で子どもの面倒をみる経験を経たのち、助産師の学校へ。そして2008年9月卒業。翌年1月からはアイルランド、ダブリンの病院に就職が決まっていた。

この間の休みを利用して日本に来て、北海道への一人旅もして2ヶ月滞在。そんな中で、昔付き合いのあった大貫家を狭山市に訪ねて1泊した。たまたま週末で帰省していた、あの時の6歳の少年、仰（あおぐ）君と22年ぶりの再会。もっとも当時2歳だったカリンさんが覚えていたはずはなく、初対面同様だったが「いい人だな」とビビッときた。すぐにメールのやりとりが始まった。そうして、その年の年末には今度は仰さんがハイデルベルグを訪れ、カリンさんの家に1週間泊まっていった。つまり、若い二人はたちまち恋に落ちたのだった。しかし、1月からダブリンでの就職はどうする？カリンさんは彼の方を選んだ。「仕事はどこに行ってもあるけど、出会いはいつでもあるわけじゃない。中途半端がイヤだったので、日本に行こうと決心しました」と潔い。

こうして、昨年2月に日本へ来て、8月に入籍、9月にハイデルベルグで双方の家族や友人たちと結婚披露パーティを開いた。白無垢と母の着物の花嫁衣裳がカリンさんに似合って、着物を初めて見た友人たちはびっくり、大いに祝福してくれた。

助産師の仕事は素晴らしいと思う。高校時代、助産師の後をついて、お産に立会い、感動したのがこの仕事を目指すきっかけだった。ドイツでは産前産後も助産師が診て、相談も受ける。「命が誕生するまでの流れにトータルで関われる、かけがえのない仕事である」と思う。

東久留米市国際友好クラブでカレンさんを知る青木良さんは「地に足がついた堅実な考えと柔軟性も合わせ持つ、頭のいい女性」と評する。

母の国、日本で助産師として活躍する日も近い。ドイツのいい面も取り入れたカリン助産院が、そのうち東久留米に出現するかもしれない。

犬の総合ケア
多摩ナンバーワンの店が目標

武岡史樹さん（35歳）

右）ダークブルーのフラッグが目印『DOG STATION』
下）可愛いペットグッズがいっぱいの店内。奥がトリミングルーム。

ペット関連の専門誌に執筆もする多才な経営者。

武岡さんは小平市あかしあ通り沿いにある「DOG STATION」のオーナーである。犬を主にしたペット用品の販売、トリミング、ペットホテル、ナーサリー（保育園）に、訪問して世話をするドッグシッティング、犬の移動をサポートするドッグシャトル（専用タクシー）まで、犬のことなら何でもおまかせのケアサービスを提供している。

慶応義塾大学卒業後、金融機関に8年間勤務していたが、漠然と30歳くらいで独立したいと考えていた。それには好きな動物関連の事業をしたい。小さい頃から犬と一緒で、動物愛護活動もやってきた。退職前から事業計画を練り、2004年に脱サラ。直後に武岡さんは愛犬（フラットコーテッド・レトリバー）を連れ、北海道をヒッチハイクで旅する。この旅行記を『犬連れ北海道3000キロの旅』（エイ出版）として出版。人生の次のステップに立ち向かう、ひとつの区切りとなったのだろう。

起業に向け全国のペットショップを100店以上見て回った。物件探しに時間がかかり、脱サラ後2年余り、自己資金と公的資金を活用して、地元小平で2006年4月にオープンすることができた。この時に小平商工会が実施する創業者への家賃補助制度「こだいらチャレンジショップ」に応募。審査を経て認定され、当初とても助かったという。

事業計画は綿密に立てたが、現実は厳しい。顧客開拓に苦労し、公園などでチラシ配りをしてPR。利益を出すのが大変だった。大切なペットを預けてもらうには、信頼されることが一番である。そのうちお客さんが他のお客さんを連れてくるようになった。こうして4年、店の会員は1200名に増え、スタッフも9名になり、店内も増築した。

取材の途中、武岡さんが急に店の外へ飛び出して行った。何事かと思いきや、お得意様のワンちゃんが散歩中だったのだ。武岡さんは片ひざをつき、犬目線で話しかけ、頭をなでていた。犬への愛情があふれるような場面だった。

「この仕事をしていると、ワンちゃんと一緒に人生を歩んでいるような感じなんです。ワンちゃんの家族の次に親しい存在になりたいし、また、店に来たくなってもらえるように対応しています」

そのためには第一に店の衛生環境、常に掃除をしている。次がトリミングの技術だ。売上げの約半分を占めるトリミングだが、保育と同様に時間と労働に対して利益率が高い仕事ではない。今年はスタッフの経済面での働く環境を充実させるつもりだ。

武岡さんは1店のオーナーで終わるつもりはない。目指すはドッグステーション2号店だ。この不景気で皆が後ずさりをする時、目標に向かい前進する姿は頼もしい。「大型店はこわくない」と言い切れる細やかなサービス、明確なビジョン、課題の分析、実行力。経営者としての資質を備えた武岡さんのチャレンジは続いていくだろう。こういう若い経営者に街を活性化してほしいと願う。